

徒然草における説話的世界の探索

― 顕基説話の受容を中心として ―

王 岩

はじめに

徒然草は中世随筆文学の代表作であると言われている。ところが、この作品は、随筆文学に規定される一方、作品中の、説話的章段が多数散在し、作品全体に対する比率が高いことも事実である。にもかかわらず、徒然草は説話集ではなく、随筆とされている。その所以に関しては、西尾光一に、「徒然草における説話的発想」¹と「徒然草の源泉―説話」²という示唆的論考がある。西尾はその前者で、説話と随筆との交錯という視点から、徒然草における説話的発想を次のように指摘している。

兼好にとって説話として伝承されたものが、彼自身の直接的な自己見聞として確かめられる確かめ方まで記しつつ、感想・批評・論証などの兼好の自己発想の中にも的確にとりこまれているところ
に、『徒然草』が説話集ではなく、随筆の書である所以がある。と同時に、兼好の随筆において、その発想の源泉に説話があることを見逃してはならないと考える。³

従来の説話は、大体ある伝承圏に帰属するものであって、編者が意図的に関与するものは少ないが、徒然草の場合は、先行説話集に類出する説話に触れつつ、兼好によって意図的に作り上げられた説話の世界を呈している。三木紀人は、「徒然草・説話的世界への接触」において「徒然草の場合は、説話はいくまでも作者の統制のなかにある。兼好によって磨き上げ、息をふきかけられた各説話は、作品全体に見える自照性の濃厚なじみに置かれる事によって何事かを語りかける」⁴と指摘している。また、説話の作品全体における位置づけについては、「説話が作品中で従属的要素をなしているわけではない。おそらく、想像以上に、随筆的部分の奥行きを説話が増しているであろう」⁵と述べている。

先行説話集に見られる説話の引用は、徒然草では、いわゆる第一部で言及されているものが多い。たとえば、増賀・顕基・聖徳太子・西行などは、いずれも中世説話集に類出した人物である。第二部で描かれた人々は、ほかの説話や作品に見出されない群像である。その例としては、因幡の入道、良覚僧正、仁和寺の無名僧たち、盛親僧都、等々がある。本稿は、第一部で言及された先行説話集に類出する顕基説話を中心に、徒然草における先行説話集の受容の様相を検討し、兼好の説話的世界の特質の一端を窺いたい。

一 徒然草における顕基説話の受容

徒然草第五段は、人間が、不運の境遇にある場合、どのような生き方がもっとも望ましいかについて、兼好が自分の理想的な身の対し方を語る一段である。

不幸に愁へに沈める人の、頭おろしなど、ふつつかに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つこともなく明し暮らしたる、さるかたにあらまほし。

顕基中納言のいひけん、配所の月、罪なくて見ん事、さも覚えぬべし。⁶

(第五段)

顕基が説話集に頻繁に登場する人物であり、「配所の月」という語句も、中古・中世知識人の共感を寄せた顕基の名言として、『江談抄』をはじめ、『袋草子』、『宝物集』、『古事談』、『発心集』、『平家物語』、『撰集抄』、『十訓抄』など諸書に記されている。

稲田利徳は、「より広い周知の説話・故事・至言は、長い伝承を通して、人々の共感が背景にあるわけで、兼好はそれを引用することで、自己の見解を、より普遍化、典型化させようと目論んでいたともいえよう。三十段ころまでの説話的要素は、そういった意味合いを込めての介入と見做してよからう。」⁷と述べている。

ところが、顕基説話は広く知られているようにみえるが、その出典については、必ずしも明らかになつたとは言えない。従来、徒然草第五段「配所の月」の出典をめぐる、先学によって多岐な見解が示されている。古く『徒然草集説』(閑寿 元禄一四年刊)を始め、『宝物集』を出典とされたが、その後は、『発心集』を出典とする見方がほぼ定説になつていく。それについて、福田秀一(『徒然草の出典と源泉』『国文学 解釈と鑑賞』一九七〇年三月)は、「文章からみても考えられる」と述べ、田辺爵(『徒然草諸注集成』)、久保田淳(『諸説一覽徒然草』)も『発心集』

とする見方を示している。しかし、安良岡康作(『徒然草全注釈』)は第五段の真意を、「官位昇進の望みを失った人」に対する兼好の感慨と捉え、それが、『十訓抄』に近いという見解を提示しており、ほかに、高乗勲『徒然草の研究』は、第五段の本文が『撰集抄』に一番近いという立場から、『撰集抄』と推定している。

諸家の見解にはそれぞれの理があつて、兼好が先行説話のいずれを受容したのかについては、にわかには決し難い。⁸ いま一度、「配所の月」という語句が見られる諸書を提示すると、次のようである。⁹

① 『江談抄』(第三) — 「入道中納言顕基、常に談られて云はく、「咎なくて流罪とせられて、配所にて月を見ばや」と云々。

② 『袋草子』(三) — 「また常に云はく、「配所にて月を見ばや」と云々。

③ 『宝物集』(七) — 「入道中納言顕基卿の、つみなくして配所の月を見ばやとねがひ給ひしは、流罪のこのもしきにはあらず、此よをおもひすつべき善智識にあはんとなり。

④ 『古事談』(一) 尋常の時は、常に白楽天の詩を詠ず。古墓何世人、不知姓与名、化為道傍土、年々春草生と。また云く、「あはれ罪なくして配所の月を見ばや」と云々。

⑤ 『発心集』(五) — 「いとみじきすき人にて、朝夕琵琶をひきつつ、「罪なくして罪をかうぶりて、配所の月を見ばや」となむ願はれける。

⑥ 『平家物語』(卷三) — 「もとより、つみなくして配所の月をみむといふ事は、心あるきは人の願ふ事なれば、おとどあへて事共し給はず」

⑦ 『撰集抄』(四) — 「朝につかへしそのかみより、たゞあけくれば、「哀、罪無くして配所の月を見ばや」とて涙をながし、「古墓何の世の人

ぞ。性と名とを不知。年々春の草のみしげし」と詠じて、けしからず泪をながしけるとかや。

⑧『十訓抄』(六)―顕基中納言の、つねは「罪なくて、配所の月を見ばや」といはれるには似給す。よき善知識のついでを得ながら、身をむなしくなしはてし、無益のことか。

戸谷三都江¹⁰は、顕基説話の構成要素にしたがって、諸書における該当する話柄を整理し、顕基説話は『発心集』のみが、「いといみじきすき人」としての顕基を記し、すき人としての立場で「罪なくして、配所の月を見ん」と願ったと記していることを指摘した。また、顕基自身も、白居易の『琵琶行』から、「罪なくしてみる配所の月」を想った。それゆえ、「いといみじきすき人にて、朝夕琵琶をひきつつ」という『発心集』独自の叙述もあり得た。さらに、『白氏文集』を愛し、草庵の孤独の夜に、白居易と語る慰みをもった兼好も、顕基や長明と同じであったと考えられる。このような観点から戸谷は、「『発心集』以外には、顕基説話は兼好との関係を考えられにくい」と推定した。

たしかに、戸谷に論究されたとおり、「いといみじきすき人」としての顕基を記したのは『発心集』のみであることから、出典を『発心集』と見ることができらるだろう。しかし、稿者の考えでは、『発心集』の一書のみを出典とされる結論を出すのはやや性急であると思われる。なぜなら、表現上における両者の大きな相違を見逃してはいけないと考えるからである。次に両者の表現を対比してみる。

『徒然草』―顕基中納言の言ひけん、配所の月、①罪なくして見ん事、さ

も覚えぬべし。

『発心集』―いといみじきすき人にて、朝夕琵琶をひきつつ、「②罪なくして罪をかうぶりて、配所の月を見ばや」となむ願はれる。

①と②の相違点は、「被流罪」という点にある。この相違を無視して、第五段の出典を『発心集』とされることが果たして妥当であろうか。

もともと、戸谷は、八書の「配所の月」を、表現上から整理し、次の三通りになると指摘している。

①無咎被流罪、配所ニテ月ヲ見ばや。(『江談抄』『発心集』)

②罪なくして配所の月を見ばや。(『宝物集』『古事談』『平家物語』『撰集抄』『十訓抄』)

③配所にて月を見ばや。(『袋草子』)

以上の三通りの分類については、戸谷は「このうち、①がとくに「被流罪」といつている点には、やや積極的な流罪に対する姿勢が感じられるが、①と②とは、ほとんど同じと見てよいであろう」という見解を示している。

しかしながら、「配所の月」の意味と結びつけて考えると、①と②が、「同じと見てよい」という観点については、疑問を抱かざるを得ない。

稿者は「被流罪」という語が入っているかいないかということが、「配所の月」の真意を理解するための重要な分岐点になると考える。したがって、稿者は、以上の三通りの表現の相違を認める立場をとって、「配所の月」典拠の問題を考えてみたい。そのうえで、兼好における先行説話集の受容の特質について、新たな提示を試みたい。

二 「配所の月」の出典について

第五段の構成は、「さるかたにあらまほし」までの前段と、顕基のせりふで結ばれる後段の二段落によって成り立っている。前段は、「さるかたにあらまほし」で示されているように、ひっそりとした隠遁生活への志向が鮮やかに語られている。後段は、前述した隠遁の理想像を具体化し、顕基の「配所の月、罪なくて見ん事」というせりふをあげて、強い共感を示しているのである。前段と後段を結んだものについて、戸谷は、説いたのは多くはないとしながら、従来の諸説を次のとおりまとめている。¹¹

(一) 罪があつては気がとがめるが、罪も何もない身のゆつたりした心持で、荒涼たる配所に一人静かに月を眺めるといふ、その閑寂な気持ち味が味わってみたいというのである。(略)「あるかなきかに待つこともなく明かしくらす」閑寂な境地と、この「罪なくて配所の月を見る」といふ境界とに共通したところがあるからである。(佐野保太郎『徒然草講義』)

(二) 「配所の月」を罪なき人が見るのではなくて、罪ある人に見る配所の月を罪なき人の心において見る願いであるからである。(富倉徳次郎『類纂評釈 徒然草』)

(三) ①兼好は、例に自分自身は無実の罪で、内心清澄であるが、世俗には離れた生活を送る、そういう複雑な生活を連想しているのである。(山岸徳平・三谷栄一共著『徒然草評解』)

②前段より進んで、「出家生活をあらまほしき」ものとしてあげている。それも、「あの人はどうして」と怪しむようなデリケートな動機でありたいとし、顕基の語をひいている。(橘純一『徒然草新講』)

(四) 第五段の前段を「官位昇進の望みを失った人の、困窮し、落魄した生活」と解されて、「世間的地位や栄達への願いから解放された。そういう意味での、心の束縛から超脱した自由な境界に対する、兼好の憧れの表現」とされた。そして、後段に顕基の言葉を引いたのは、「なんらの罪もない身で流刑の地にあつて、世間的栄達、名利の絆から解放された、自由で高朗な心境における、天上の月を望み見る生活をあこがれたことに兼好が同感したもの」であつて、この前・後段は、落ちぶれ果てた中にも、世間的欲望を超越した心境を持っているのが、前の段落に相通するもの。(安良岡康作『徒然草全注釈』)

戸谷は、以上の諸説を整理しているものの、「諸説のいずれもそれぞれの理があつて、一概に定めがたいのである」という結論にとどまっている。

たしかに、前段と後段は、閑寂の点において、共通性が見られないわけではないが、「配所」を単なる閑寂な境界として捉えることは果たして妥当であろうか。

ここで、問題となるのは、「配所の月、罪なくて見ん事」の真意は、①本当に潔白無罪の身なのだが、配所にあつてあわれ深い月を見たいのか。それとも、②世間的にも無罪の身であると認められた上で、配所というもいべき閑所に身を置いて閑雅に月を見たいのかという点である。

それについて次の『文段抄』は②のように解釈している。

此顕基の願ひ給へる心は閑なる所にて月を見度となり。隠遁を好る道心より願るなるべし。顕基などやうの公卿は朝庭の宮仕にか、づらひて彼配所のごとき深山遠島などを見る事罪有て左遷の罪ならではなき事也。顕基はもとより道心おはしける人なれば其罪によりて左様の浦山の月を見るは本意にあらずただ何となく世をすて、閑居にて月をみばやとの心なり。

(『文段抄』)

しかし、「配所」を閑かなるところと解し、世俗を離れるところで哀れ深い月を眺めるといふ解は、「配所」にまつわる流刑地としての肅然たるイメージが捨象されて生じることになる。

ここで、強調したいのは、「配所の月、罪なくて見ん事」を実体験した人々が存在したことである。三木は、「顕基の言に引かれた人々の念頭には、実在・架空おりませで、期せずして「配所の月」を見ることになった人があつたはずである。その例は、菅原道真であり、彼を回想しつつ感傷にひたつた光源氏であり、更にそれらに先立つ人としては、白楽天も含めてよいだろう。」¹²と指摘している。

須磨に流された光源氏の話はあまりにも有名なので、しばらく措くとして、ここでは、菅原道真と白楽天について、少し詳しくみてみたい。菅原道真は、忠臣として名高く、宇多天皇に重用され、醍醐朝では右大臣にまで昇つたが、左大臣藤原時平に讒訴され、大宰府へ左遷され、「配所の月、罪なくてみん事」を実体験した一人である。

菅原道真は大宰府に流され、謫居の中、次の「秋夜」の詩を書いた。

秋夜。九月十五日

黄萎顔色白霜頭 黄に萎める顔色 白き霜の頭
况復千餘里外投 况復むや千餘里の外に投れるをや
昔被采花簪組縛 昔は采花 簪組に縛がれき

今為貶謫草萊囚 今は貶謫 草萊の囚たり

月光似鏡無明罪 月の光は鏡に似たれども 罪を明むることなし

風氣如刀不破愁 風の氣は刀の如くなれども 愁へを破ることあらず

隨見隨聞皆慘慄 見るに隨ひ聞くに隨ひて みな慘慄

此秋獨作我身秋 此の秋は獨り我が身の秋と作りたり

「月光似鏡無明罪 風氣如刀不破愁 隨見隨聞皆慘慄 此秋獨作我身秋」という四句から、冤罪の晴れるべくもなく、都へ帰るすべもないことを悟つた道真の心境を伺うことができる。配所に流され、月を見て、道真の心に抱えられたのは、極まりない不遇感・悲哀感であつたと思われる。

白楽天は『琵琶行・序』に述べているように、江州司馬に左遷された八一六年、船上で琵琶を弾く女の語る哀れな身の上話に、左遷された自分の境遇を重ね合わせて、名高い長編感傷詩「琵琶行」を作つた。

『琵琶行』は八十八の句からなる長詩であり、潯陽江のほとりで、夜に客を送別しようとした場面を描いたものである。潯陽江の水面に、月が沈もうとしていたとき、突然、琵琶の音が水上から聞こえてきた。船

を動かして近づけたら、琵琶を弾いていた女性がいた。女性の琵琶の音色を聞いていると、その場にいたみんなが顔を掩って涙を流して泣いた。

琵琶行（部分）

感我此言良久立、却坐促絃絃轉急。

淒淒不似向前聲、滿座重聞皆掩泣。

座中泣下誰最多、江州司馬青衫濕。

我が此の言に感じて良久く立ち

坐に却り 絃を促むれば絃転た急なり

淒淒として向前の声に似ず

満座 重ねて聞き 皆泣を掩う

座中 泣下つること誰か最も多き

江州の司馬 青衫湿う

最後の「座中泣下誰最多、江州司馬青衫濕。」という二句が、江州に左遷された作者の心に抱えられた不遇感と濃厚な悲哀感を鮮明に表していると考えられる。

菅原道真の「秋夜」と白樂天の「琵琶行」を通し、「配所の月、罪なく
て見ん事」の真意は、①つまり、本当に潔白無罪の身なのだが、配所
にあつてあわれ深い月を見たいと解すべきではないかと考えるのである。

そうすると、顕基は、なぜ「配所の月、罪なくて見ん事」をことさら

に望むに至ったのか。この異常とも言える情念の原因は何だったのか。この問題については、戸谷は顕基自身における「配所の月」の発想は、白樂天の琵琶行からきているものとしている。「まして、『琵琶行』の尋陽江に月を浴びつつ、琵琶の悲愁を、無実の流謫の身に、しみじみとめつ、きいた白居易の詩心に、深く心動かされなかつたはずはないのである。つまり、「配所の月、罪なくて見ん事」とは、『琵琶行』の情趣への憧憬であつた。」と指摘している。

このほか、この問題を考えるには、顕基をとりまく人々の運命について言及する必要があると考えられる。顕基の一族には無罪の罪で配所に流された祖父の高明がいる。安和の変によって、高明が九州へ流罪されたのが、九六九年であつた。それは顕基の出生までには、三十一年の隔たりがある。祖父の流罪がどれだけ顕基の内面に衝撃を与えたかという事について、断言はできないが、顕基と深い血縁関係をもつた人々の運命が、顕基に自虐的な衝動をもたらした可能性がないこともないだろう。たとえば、前中書王兼明親王の隱遁、多武峯に隱遁した高光、高光を慕う妹の愛宮、花山院の御出家に従つて出家した義懐、往生談を書いた後の少将義孝など数寄な人生を送つた人々が思い合はされる。彼らは等しく不運な身であつたが、それゆえにいわば美化され、心惹かれる群像として語り継がれていった。顕基の内面にはそうした世界への傾斜があつたのであろう。

ことによるとその一方には、一条朝に於いて栄達して権大納言に至つた父俊賢への違和感があつたかもしれない。源俊賢は、十一歳の時、藤原氏の陰謀によって、左大臣父源高明とともに大宰府に行かされた。父の左遷が理由で叙爵が十七歳と他の公卿に比較して大きく出遅れた。だ

が、妹の源明子が道長に嫁いだことで摂関家との関係を持ち、権大納言に昇った。四納言の一人として、藤原道長政権を積極的に支えた。俊賢が道長との縁戚関係を利用して他の貴族・官人との仲介役を務め、道長のための政治資金の調達などの役割を担った。藤原実資は俊賢を「貪欲謀略其間共高之人也」（『小右記』寛弘八年七月二十六日条）と非難している。このように、源俊賢は、父源高明の加害者とも言える藤原政権に頭を下げ、屈折した生き方をした人であったと思われる。

自分の人生をとりまくさまざまな人々のなか、顕基は、父親の打算的な生き方には、どうも同意できなかったと思われる。顕基にとって、祖父高明の数寄な世界と対極的な立場であった父俊賢に対しては、嫌悪感を抱くことが想像できるだろう。

また、弟隆国も、父俊賢と同じような道を踏んでいた。彼は、父俊賢と兄顕基の栄光をあびて、万寿二年、二十三歳の時、中将になった。その後、頼通の好意によって、長元二年、二十六歳の若さで、蔵人頭に補せられた。その後、兼伊予守、頭中将を経て、長元八年、ついに公卿の列に入り、兼右兵衛督、叙従三位に上がった。隆国は頼通の恩に感激し、頼通のため全力を尽くしたのであった。隆国については長野誉一の研究に詳しい。¹³

道長に仕えた父俊賢、頼通に奉仕した弟隆国、同じ因縁が親子二代に亘る摂関家との関係を深めていた。この事実が、「配所の月、罪なくて見ん事」という意識を持つ顕基にとつては、大きな違和感のもとになっていたかもしれない。とはいえ、顕基自身の仕えたのは後一条天皇朝であったが、後一条天皇の母親藤原彰子は、藤原道長の娘であり、中宮の藤原成子も藤原道長の娘であった。このように、後一条天皇も、藤

原一族に密接な縁戚関係を持っている。つまり、顕基自身も、祖父の源高明の敵対関係にある権力政権に奉仕する運命になる。顕基がそのような不純な生き方を変えたかったのかもしれない。ついに、後一条天皇が二十九歳の若さで崩御した事件は、権力社会を離れ、遁世者になることを決意させたのであろう。

三 説話的要素介入の特質

兼好が顕基の語を引いている理由について、久保田は「もとより彼がおしなべて中世の人々にとって、理想的人物と考えられていたからであらう」と指摘している。

稲田利徳は、「より広い周知の説話・故事・至言は、長い伝承を通して、人々の共感が背景にあるわけで、兼好はそれを引用することで、自己の見解を、より普遍化、典型化させようと目論んでいたとも言えよう。」¹⁴と徒然草三十段ころまでの説話的要素の介入の様態を論究した。

顕基は文学、芸能に恵まれた才能をもつ青年貴族の代表であり、顕基説話も中古・中世の多くの知識人が共感を寄せた説話である。それらは、兼好が顕基の語を引用した大きな理由になると考えられる。しかし、兼好の顕基に対する共感は、その文学や芸能の才能に対するとともに、彼の境遇に対するものでもあったと考えられる。顕基は十二歳から朝臣としての経験がはじまり、二十四歳の時、蔵人頭として後一条天皇に奉るようになった。その後、三十歳にして正四位下参議となり、左中将、周防権守等を経て、従三位、三十六歳のときに権中納言となったが、翌年、後一条天皇が崩御されたため、顕基は四日間のと、「不仕二君」

と決意し、大原に出家したのである。前節に触れたとおり、顕基が純正な心に従い、俗世の栄達から我が身を切り離したという事例が、兼好にとつて大きな共感を起こし、主人公の追体験をしたいという発想を抱かせたかもしれない。

第五段を執筆する際の兼好が、在俗時代だったのか、それとも、すでに出家した後だったのか、この問題に関わる成立年時や成立過程について、橋純一をはじめ、諸説が提出されている。そのなか、西尾実・安良岡康作が作品の思想内容、とくに無常観の変化に着目し、三十段あたりまでを第一部とし、出家前より早い時期に制作したものであるという観点を述べた。それは、橋説を補完したものとして、考慮の余地が残っていないながら、現況としては、認められるだろうと思われる。そうすると、第五段を執筆する際、兼好はまだ在俗時代にあつたのではないかと思われる。

在俗時代の兼好は十九歳から二十六歳までの八年間、後二条天皇に仕えた。六位藏人から、左兵衛佐（従五位）に栄進し、前途洋々たる立場であつたが、徳治三年に二十四歳の後二条天皇の崩御に逢つてしまい、激変する環境のなかに、兼好が辞任を決意した。遁世までは、数年間の隔たりがあつた。その数年、兼好が自分の人生の生き方を真剣に考えていたと思われる。思考者である兼好の脳裏に浮かび上がっていたのは、きつと先達の遁世者の群像の一人——顕基があつただろう。たしかに、在俗時代における兼好と顕基はともに忠臣として主君に仕え、主君が早世し、その後、世相への批判と遁世への道を決意した経歴には相当な類似性が見られるという点である。顕基説話の引用からは兼好の濃厚な自照性がかがえ、説話主人公の追体験をしたという発想が潜んでいる

のではないかと思われる。また、配所に流された人への傾斜が、兼好を遁世への道に導いていたのかもしれない。

ところが、兼好が先行説話集を引く際に、そのまま言葉を引用するわけではなく、自分の思想・感情を表現するため、複数の書物から伝承した説話を意図的に改変するというプロセスで磨き上げたり、あるいは雑多な説話の手柄から取捨選択し、焦点化させたりするという特徴が見られると思われる。

1 複数の書物に拠る説話の改変

前節で論述したとおり、第五段で取り上げた顕基の説話が、『発心集』一書ではなく、複数の書物に拠って創作したものであると考えられる。

第五段顕基説話の典故に関して、兼好は、『発心集』の琵琶を弾きつつ、配所の月をみたいという「いとみじきすき人」としての顕基像を、『発心集』から形成したが、「罪をかうぶりて」の一句は『発心集』ではなく、他の書物に拠って、書かれたのではないかと考えられるのである。ただし、『徒然草』と同じ措辞のものが上述のように数種もあり、そのどれかに特定することはできない。が、『発心集』のみを典拠とする大分の論調にいささか異を唱えたいと思うのである。

2 説話的要素介入の焦点化

兼好が説話的要素を介入する際に、従来の多くの構成要素から取捨選択し、自分の表現しようとする主張にあわせて、手柄を絞り込むという構想が見られる。それ以外の手柄については、当段では触れないという執筆方針が見られる。次は、第五段における説話要素の介入の焦点化

について、検討してみる。

従来の先行説話集に見られる顕基説話の構成要素を整理すると、次のように分類できる。

① 顕基の出自、資質。
 ② 朝臣としては、後一条天皇の寵を得、官位昇進その他に不足なき身であった。

③ 若くより心は常に菩提にあった。

④ 常に白楽天の詩句「古墓何世人 不知姓与名 化為道傍土 年年春草生」を詠じていた。

⑤ また常に、琵琶を弾きつつ、「配所の月、罪なくて見ばや」と言っていた。

⑥ 後一条院の崩御にあつて出家。

⑦ 出家後は、横川、大原山、上醍醐などに住み、延殷を師とし、仏道に励み、智行世にきこえた。

⑧ 出家後の逸話

(イ) 上東門院と歌の贈答のあったこと。

(ロ) 関白頼通に、子息俊実の将来を託すこと。

⑨ 病を得たのを幸として、念仏往生したこと。

⑩ 法名は、円昭。

⑪ 在俗時の逸話。顕基の愛を失つて出家遁世した室の遊君のこと。

ところが、兼好が『発心集』を原拠としながら、顕基説話の話柄を選択取捨し、「さも覚えぬべし」とする対象を「配所の月、罪なくて見ん事」と焦点化している。

『発心集』における顕基説話の話柄は、前述のごとく、家柄、昇進満

望、天皇愛寵、心在菩薩、白楽天詩、配所の月、出家、不供灯、不二仕君、出家場所、隱遁の地、出家生活、上東門院歌の贈答、俊実の事、すき人・琵琶など多岐にわたるが、『発心集』に内包されるこれらの話柄から、兼好が、「配所の月」のみを焦点化したことは、主人公顕基の美意識に対する兼好の共感が鮮やかに見て取れるのである。

また、話柄の焦点化と反対に、その他の話柄の取捨から、内心の矛盾と動揺を抱え、世俗への批判と無常感を抱く兼好の姿が浮かび上がってくるように感じさせられる。たとえば、「子供に対する懸念」、「訪問者とのかわり」などは『発心集』の作者である長明の関心とは大きな相違が見られる。

『発心集』顕基説話は顕基の家柄から始まり、顕基の日常、後一条院の崩御と顕基の出家、上東門院との歌の贈答、大原の庵室への頼通の慰問を経て、頼通に顕基の意を汲むという話柄で結末をつける。

後一条院の死を機縁に出家した顕基は大原に籠り、仏道一途に修行の日々をつづけていたが、藤原頼通が彼の庵を訪れ、別れる際に「俊実是不覚の者にて侍るなり」と頼通に言ったのである。頼通が「世を背くといへども、なほ恩愛は捨てがたき物なれば、思ひあまられたるにこそ」とあはれにおぼされて、俊実を美濃の大納言まで引き立てた。

この説話の最後の部分、大原で隱遁の生活を送りながら、俗世に残したわが子への愛情を忘れなかったという顕基の描き方が注目に値するものであると思われる。

もともと、仏者にとつて、妻子の存在は修行の妨げとなるものであった。多くの修行者は、妻子を捨てて、出家の道へ踏み出したのである。長明自身もそのなかの一人であった。

長明は『発心集』において、修道者の出離の話をいくつも記している。例えば、「高野の南に、筑紫上人、出家登山の事」（巻一第六話）、「ある禪師、補陀落山に詣づる事」（巻三第五話）、「斎所権介成清の子、高野に住む事」（第七卷二三話）などその例である。これらの話に登場した主人公は、追いつがる娘を邪魔物と威嚇した父親、妻子の必死の引き止め、哀願にも一切耳を貸そうとせず、一人で南海に消えて行った男、国許から面会にきた肉親、妻に、今生での再会は二度としないと切り切つて、高野山に入つていった男であった。いずれも恩愛を厭離し、求道心を守り抜いた修行者であった。「悪縁にあひて、妻子をまうくるためし多かり。我も人も凡夫なれば、ただ近づかぬにはしかぬなり。」（巻四第五話）と書いたように、妻子は悪縁であった。長明の考えでは、妻子は厭離すべき、否定すべき存在であった。長明にとって、恋人、愛人、夫婦の間だけでなく、親子の間の愛も、いくら強固な絆が存在していたとしても、それは結実することはない、成就できないものであるという考えを持つていたと思われる。出家者は、愛から離脱しなければならぬと思つていた長明は、大原に籠りながら、子供への思いやりを忘れなかつた顕基の人間性に共感をもつて、『発心集』に記すことにしたのではないかと思われる。

浅見は「恩愛は拒否されねばならないと知りつつも、恩愛に惹かれる長明の恩愛観。」¹⁵と述べ、愛子のことへの心配りを忘れなかつた顕基の描き方がそれである。肉親へのこまやかな愛情の持ち主、心優しい、豊かな心の持ち主として描かれているのであった。「長明にとつてやはりそのような情愛を希求してはいたのではないかと考えられる。」¹⁶と指摘する。

兼好は第五段で顕基の子への思いに触れていないが、『発心集』の長明の記述を意識したからこそ次に子を持つ事への戒めを述べたのであろう。

わが身のやんごとなからんにも、まして数ならざらんにも、子といふものなくてありなん。

前中書王・九条太政大臣・花園左大臣、みな族絶えん事をねがひ給へり。染殿大臣も、「子孫おはせぬぞよく侍る。末のおくれ給へるはわるき事なり」とぞ、世継の翁の物語にはいへる。聖徳太子の、御墓をかねて築かせ給ひける時も、「こゝを切れ、かしこを断て。子孫あらせじと思ふなり」と侍りけるとかや。

（第六段）

「子といふものなくてありなん」という主張を提示しながら、その根拠を述べず、その代りに先人の例を取り上げている。第六段で取り上げられた聖徳太子の話について、その典故は、『聖徳太子伝暦』下に求めることができる。

廿六年（中略）冬十二月。太子命駕。科長墓処監造墓者。直入墓内。四望謂左右曰。此処必断。彼処必切。欲令応絶子孫之後。墓工随命。可絶者絶。可切者切。太子大悦。即夕旋駕。嘆謂妃曰。遥憶過去。因果相授吾未養了。禍及子孫。子孫不統。豈云大咎。孔子遺教。无後者為不孝矣。吾為釈迦大聖弟子。豈為孔子小賢弟子乎。妃答啓曰。左之右之。依殿下命耳。三従之妾。更何異望。太子善之。

以上の記述からみれば、聖徳太子が、禍が子孫に及ぶのを避けるべく断絶を願っていたと考えられる。隱遁を志向するものは、当然、肉親への執着を否定する立場をとる。兼好自身に嗣子がなかったようである。ここに子孫無用を主張した先人の話を列挙し、自己正当化を図ろうとしたと思われる。ところが、史実を考察すると、いわゆる先人の話は、必ずしも事実であるわけではない。具体的に、三木は、源有仁およびその他の三人の嗣子に関して、詳細な考察を行った。

源有仁は『今鏡』によれば、往年の名士たちの子孫のはかばかしくないのを見て、「我が子などありともかひなかるべし」と言つたという。有仁の言は、彼自身に子がなかった（娘は二人いたらしいが）ことを自ら慰めるための言のような趣があり、それ以上のもものではなさそうである。¹⁷

また、源有仁のほか、他の三人については、三木は「それぞれ、質あるいは量において子に恵まれず、人々に同情されたのは確かだが、彼らに兼好のような主張があった気配はなく、兼好の論拠としてはほとんど無力であろう。」¹⁸と述べ、賛同できると思われる。

しかし、いずれにしても、兼好が長明の描かれた子供への懸念を抱えた顕基を意識しながら、第六段を書きはじめたと考えられる。親子の人間性を認めようとした長明に対し、兼好が反論を示そうとする姿が浮かび上がってくる。

終わりに

兼好が先行説話集より顕基説話を引用する際に、複数の書物に拠って伝承した説話を自分の意図によって、改変して再創作するという構想があると論述した。また、雑多の構成要素から取捨選択し、自分の主張と一致する話柄だけを絞り込むという構想も見られる。つまり、伝承した先行説話を自分の意図によって、〈改変〉と〈添削〉のプロセスを統制しているのである。

徒然草の内部には、〈自己表現〉と〈自己隠蔽〉二つの志向が混在していると言われる。そのような自己表現を示すと同時に、自分の主張と一致しない話柄については、反論をその場で示さず、ほかの章段に譲るという執筆方針が見られる。まさに、いずれの段も、〈自己表現〉でありながら、〈自己隠蔽〉でもあるということである。この点について、三木に優れた論考がある。

徒然草の内部には、自己表現と自己隠蔽という対極的な二つの志向が同時に見てとれる。前者の現われの代表が回想的諸段であり、その逆が説話的諸段ということに形式的ではなりやすいが、そうはいかないところに本書のむずかしさがある。むしろ、いずれの段にも二つの志向の微妙な葛藤と均衡を想像しておいた方が無難である。各段の表面的な淡泊さにもかかわらず、直接表現されぬ陰の領域の広さはおそらく大方の予測をこえるであろう。¹⁹

第五段と第六段の関連を考えると、まさに、「いずれの段にも二つの

志向の微妙な葛藤と均衡」が想像できると思われる。

徒然草の説話的世界には、多くの人間を描いた話がある。今後は、増賀上人、久米の仙人、西行、因幡の入道など先行説話の受容の様相を検討し、兼好によって構築された新たな説話的世界を探索してみたいと考えている。

注

- 1 西尾光一「徒然草における説話的発想」『説話文学小考』教育出版 一九八五年一〇月
- 2 西尾光一「徒然草の源泉」『徒然草講座』第四卷 有精堂 一九七四年二月
- 3 同1
- 4 三木紀人「徒然草・説話的世界への接触」『国文学』一七一九 一九七二年七月
- 5 同4
- 6 徒然草本文引用は三木紀人『徒然草全訳注』講談社学術文庫 一九七九年九月
- 7 稲田利徳「徒然草」の説話的章段考」『徒然草論』笠間叢書 二〇〇八年一月
- 8 「徒然草」における「発心集」からの影響関係を論じたものに、金文峰「徒然草」における説話文学の影響について―「発心集」からの引用をめぐって―『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』一四巻一号 二〇〇二年一月があるが、顕基説話についてはとりあげていない。
- 9 本文引用は次の通りである。

『江談抄 中外抄 富家語』新日本古典文学大系 岩波書店 一九七九年六月
 『袈衣草子』新日本古典文学大系 岩波書店 一九九五年一〇月
 『宝物集 閑居友比良山古人霊託』新日本古典文学大系 岩波書店 一九九三年二月
 『古事談・続古事談』新日本古典文学大系 岩波書店 二〇〇五年一月
 『方丈記 発心集』三木紀人校注 新潮日本古典集成 一九七六年一〇月
 『平家物語』日本古典文学大系 岩波書店 一九七九年
 『撰集抄』(上・下) 新撰日本古典文庫 現代思潮社 二〇〇六年一〇月

『十訓抄』新編日本古典文学全集 小学館 一九九七年二月
 『秋夜』『菅家文章 菅家後集』日本古典文学大系 岩波書店 一九六六年
 10 戸谷三都江「顕基の説話と徒然草(二)」『学苑』一 一九七三年一月
 11 同10
 12 三木紀人「配所」場所と想像力」『国文学』一八一―九 一九七三年七月
 13 長野菅一「宇治大納言をめぐる」『続宇治大納言をめぐる』『説話文学論考』笠間書院 一九八〇年二月 所収

14 同7
 15 浅見和彦「発心集―長明の恩愛」『説話集の世界 二』(説話の講座五) 勉誠社 一九九三年四月
 16 同15
 17 三木紀人「方丈記・徒然草」(鑑賞日本の古典) 尚学図書 一九八〇年二月
 18 同17
 19 同4
 (おう) がん・中国瀋陽 東北大学外国語学院准教授 同大学中日比較文化研究所副所長 本学日本研究センター臨時研究員)